

Gordon Brown and the EU

ゴードン・ブラウンとEU



ジャスティン・マッカリー

英ガーディアン紙
東京特派員

Justin McCurry
Tokyo Correspondent for the Guardian



トニー・ブレアに替わり英国の首相になったゴードン・ブラウンにとって、EUが最初の頭痛の種となったことは、成り行きからいって当然のことであろう。

ブラウンが Downing Street 11番地（財務相官邸）から10番地（首相官邸）へと居を移すわずか2週間前に、（不運にも）暗礁に乗り上げているEU憲法条約に取って替わる簡素化された条約のための枠組みについて、ブレア首相とフランスのニコラ・サルコジ大統領が「合意した」というニュースが報道された。サルコジ大統領は新たなEU憲法草案について「新たなEU条約であって、小型の憲法ではない」とわざわざ釈明しているが、この憲法草案に関する英仏合意のニュースは、早くも欧州における英国の役割をブラウンがどう捉えているのかを問う試金石になっている。

新EU憲法草案が討議された欧州理事会（EUサミット）の開催が、ブラウンへの政権交替のわずか数日前であったため、6月下旬のブリュッセルでの同サミットにはブレアではなくブラウンが出席すべきだと多くの者が主張していた。フランスの大統領もドイツの首相も相手がブラウンならばもっと用心したに違いない、と言っても過言ではないだろう。ブラウンは、1997年に財務大臣になって以来、ユーロスケプティック（欧州統合に懐疑的な人物）という評判を確立してきた。なんといっても、英国をユーロ圏の外側に留めてきた人物なのである。

しかしながら、ブラウンの昔からの政敵である欧州委員会のピーター・マンデ

ルソン通商担当委員は、やや含みのある発言をしている。ブラウンの欧州に対する懐疑的態度は、「トニー・ブレアとの根本的な意見の相違というよりも、短期的な政治的理由」によるものであったので、英国の政治的指導者となったブラウンは欧州に対して協力的になるというのだ。しかしながら他の欧州首脳たちは、マンデルソンの楽観的な見方とは一線を画しているようだ。ブラウンは首相に就任する前にもすでに、サルコジ大統領からEUに対する「時代遅れな」見方を改めるよう求められている。

観測筋は、ブレアの承諾した新条約に英国の権限の一部をEUに譲り渡さなければならない旧EU憲法の一部が含まれていて、それをブラウンが背負い込むことになれば、ブラウンの抱える問題は雪だるま式に大きくなるだろう、という見方で一致している。新条約の草案は、任期2年半のEU理事会の常任議長職およびEU外務大臣職の創設を含むと言われている。ある英国紙の報道によると、同草案にはEU27カ国の意思決定システムの改革も含まれており、この新システムにより、英国が自国に好ましくない法案を阻止する力は30%減るとのことである。

「互いに協力し合う政府からなる欧州」の支持者であるというブラウンは、警察・司法政策における英国の拒否権を取り除いたり、米国との安全保障のきずなを弱めたりするようなあらゆる動きには抵抗を示すと思われる。サルコジ大統領とドイツのアンゲラ・メルケル首相

の構想では、新条約の採択は議会の批准のみで決定し、国民投票を必要としないが、ブラウンの場合、国民投票に対する超党派の圧力は無視できないであろう。ブラウン自ら述べているとおり、「幻滅している英国の有権者との関係を修復する」ことを政権の目標とするならば、なおさらである。

ブラウンがEUの制度・財政改革にどのように取り組むかを予想する上で最良の手がかりとなるのは、おそらく、ブラウンの忠実な支持者で、彼の補佐官から後に財務閣外相となったエド・ボールズが、最近ロンドンのシンクタンク「欧州改革センター（CER）」のために作成した小冊子「英国と欧州～財務閣外相の展望」（Britain and Europe — A City Minister's Perspective）であろう。ボールズによると、英国がユーロ導入を拒否し域内税制調和に反対していることなどで、英国を「欧州統合構想に対する裏切り者」と非難することは、陳腐なイデオロギー論争の残がいすぎない。

ボールズが財務省でブラウンの補佐官を務めていたころと同じように、ブラウンが彼の意見に耳を傾けるとすれば、首相になったことで「経済協力の緊密化をさらなる政治統合への足掛かりとしてはならない」というブラウンの信条が変わることはなさそうである。小冊子の中でボールズは、雇用の創出、金融調和（とくに単一金融サービス市場の創設）、そして憲法改正に重点を置き、EUとしての「国づくり」についてはほとんど触れない「現実主義的な親欧州主義」を呼びかけている。

ブラウンは、すでに事実上の首相であった引き継ぎ期間中、自分の考え方が上述のボールズの考え方とは異なると示唆するようなことは何ひとつ語っていない。エネルギーや環境保護などの問題についてはより緊密な欧州域内協力を支持するブラウンであるが、今後しばらくの間は、新EU条約に関する取り決めがいかなるものになるにせよ、彼がどのような対応をとるか、極めて注目されるであろう。EU（2007年6月上旬寄稿）

P.18の文章はジャーナリストからの寄稿文であり、本稿における意見、評論、解説などは、欧州連合、欧州委員会および加盟国政府の公式の立場を反映するものではありません。